小さな問いも、大切に

初瀬 基樹

気持ちも新たに、新年度が始まりました。 あらためまして、進級、新入園、おめでとうございます。

進級した子どもたちの少し誇らしげな表情や、新しい環境にどきどきしながらも一歩を踏み出す姿に、春の訪れを感じています。

さて、今年度、私たちが大切にしていきたいテーマとして掲げたのは、**「小さな問いも、大切に」**という言葉です。

ここ数年、子どもたちには、教えられたことを覚えるだけでなく、一度立ち止まり、自分の頭で考えることのできる人に育ってほしいと願ってきました。そのためにも、日々の保育の中で、子ども自身が考える機会を大切にしていきたいと考えています。

先日、当園の職員が参加したイタリアの保育視察研修（今年2月）の報告会がありました。そこで語られていたのは、方法や技術だけではない、深い思想に支えられた保育の姿でした。

「子どもたちと一緒に取り組む活動は、まるで行き先のない旅にいっしょに出るようなもの」

「大人は子どもの 前でも、後ろでもなく、横に立って寄り添う」

それらの言葉がとても印象に残っています。

私自身も7年前にイタリアを訪れており、そのときにも感じたのですが、今回の報告でも、あらためて強く感じたことがあります。 保育室の環境も、子どもたちの活動も、目に見えるものだけではなく、関わる大人たちの子どもへの眼差し、言葉のかけ方、佇まい、そこに流れる思想そのものまでが、「美しい」と感じられるのです。

日本では「子どものいたずら？」と見えてしまうようなものでも、イタリアでは様々な素材が組み合わさり、一つの表現として形になっている（ように見える）。 その違いはどこから来るのだろうと、ずっと考えてきました。

美しいものに出会うと、「もっと見たい」「もっとさわりたい」「もっと知りたい」という気持ちが自然と湧いてきます。その内側から生まれる欲求こそが、子どもたちの「生きる力」の源なのではないか。

さらに、美しさの感じ方は一人ひとり異なり、そこに優劣はない。だからこそ、人と人がその感じ方を持ち寄り、つながっていける。 そうしたつながりをイタリアではとても大切にされている。

「美しさ」とは単なる見た目の話ではなく、子どもを一人の人として、社会をともに形づくる存在として尊重することと深くつながっているように思います。 それはそのまま、わが園の理念「ともに生きる」にも通じるものだと感じました。

視察報告会の中で、もう一つ印象的な言葉がありました。 日本の保育者は「何もしようとしない子に、どうしたら参加するようになるか」を考えがちです。 でもイタリアでは、「やらないことにも、その子なりの意味がある」と捉えるというのです。

子どもたちが何気なくつぶやく言葉、ふとした疑問や気づき――そうした 子どもたちの「小さな問い」を聞き流さず、大人も一緒に立ち止まって考える。そうした積み重ねが、子どもたちの思考を育んでいくことにもつながると信じています。

今年度も、一人ひとりの育ちに丁寧に向き合いながら、ともに歩んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。